ジェーン・オースティンと文学修業

藤田清次

I

ジェーン・オースティンの六篇の完結した長篇小説は，いずれも，程度の差はあるが，それぞれ，完成美をほこっている。1797年に制作されたと思われる書簡体小説 *Elinor and Marianne* が，多分，何度か書きなおされて，1811年に自費で出版された，ポケット型の美本 *Sense and Sensibility* と，ジェーン・オースティンの最後の完成作 *Persuasion*（1816年に制作，1798年作と思われる *Northanger Abbey* と合冊で1818年に出版）との間には，人間観察や作品構成や会話の成熟度，その他の点で，かなりの距離が認められるが，前者，つまり，*Sense and Sensibility* も，決して未熟の作品とは言えないほどの出来栄えである。この作品において，作者は，既に，人間性の機微を洞察したいくつかの名場面を描いており，作者のあやつる英語には，早くも，人間心理の微妙なあやを見事に描きわける柔軟さがそなわっている。そしてウィットやユーモアの点では，この作者の後の作品を，しばしば，凌駕するほどの鋭さが感じられる。女主人公二人の名前をつらねたに過ぎない *Elinor and Marianne* が *Sense and Sensibility* に変貌を遂げるに至るまでに，果して，どの程度の，何度にわたる改作がなされたかを知る手がかりを我々は持ち合わせていないが，それが1811年にオースティン家の負担において出版された頃には，ジェーン・オースティンは，既に，当時の知名作家たちの水準を遙かに超えた，すぐれた小説技法を身につけるに至っている。

II

1775年12月16日に南部イングランドの小村 Steventon の牧師館に生まれたジェーン・オースティンは，正規の教育を，ほとんど，受けていない。ジェーンには，James (1765-1819), George (1766-1838, 病身で，ほとんど，家庭生活に適していなかった), Edward (1768-1852), Henry (1771-1850), Francis (1774-1865), Charles (1779-1852), という六人の男兄弟と，Cassandra (1773-1845) という，大の仲良しの姉があった。父 George Austen (1731-1805) は，深い学殖の持主で，文学のすべての部門にわたって，すばらしく洗練された趣味を持ち，また，精選された蔵書をそなえていたと言われる。そして不足がちな牧師禄を補うために，自分の息子たちと一緒に，ごく限られた数の友人や知人の子弟たちを教育することに，家長としての喜びと金銭上の利得とを併せ味うことができたと言われる。人柄といい，力倆といい，そして，熱意といい，多分，模範的な教師であったに違いないジョージ・オースティンは，息子たちに，自分が最良の教育と思っていたものを，もっとも効果的な方法で施したものと思われる。

ところが，オースティン家には，二人の娘 Cassandra (1773-1845) と Jane (1775-1817) の教育問題が未解決のままであった。しかし当時の英国の教養ある家庭では，大抵，母親が娘たちの教育の担い手であったという事実を想起する時，オースティン家においても，カサンドラとジェーンの二人姉妹が，たとえ，毎日決められた時間に，正規の授業の形式で，母親から学科を教わることはなかったにせよ，折にふれ，いわば，略式の形で，そして時には，かなりあらたまった形で，母親と娘たちとの間に，「物を教える」作業がなされたものと想像してよい。しかし，既に述べたように，限られた数であったとはいえ，何人かの「塾生」をかかえこんだ，多方面に気をくばることを強いられる牧師の妻としての役割を果さなければならなかったオースティン夫人には，二人の娘の教育を責任をもって引きうける余力はなかったに違いない。彼女は，もともと，ウィットとユー

モアに富む，教養ゆたかな婦人ではあったが，物事をテキパキと処理する，活動的なタイプの人ではなかった。そこで，カサンドラとジェーンの二人は，非常に幼い頃，オックスフォードの Mrs Cawley 宅に一年間ほど預けられることになる。このコーリー夫人は，オースティン夫人の妹の夫 Dr Cooper の姉妹に当る人であった。そこで，クーパー博士の娘 Jane Cooper も一緒にやらされた。ところが，オースティン姉妹は熱病（当時 a putrid fever と呼ばれたが，今日の typhoid に当る）にかかる。ところが，コーリー夫人は頑固一徹な女性であったらしく，その事実をオースティン家に知らせようとはしなかった。ジェーン・クーパーから通知を受けたオースティン夫人はクーパー夫人と同道で，コーリー夫人宅に赴き，それぞれ娘たちを引きとることになる。ジェーン・オースティンの病状がひどくて，ほとんど，一命を失いかけたという。そして痛ましいことには，熱病に感染したジェーン・クーパーの母親が死亡する。ジェーン・オースティンがオックスフォードにやらされたのは，まだ，七歳に満たない時のことであったから，三ツ年上の姉カサンドラとは違って，物を教わる目的からというよりは，ただ，姉と一緒にいたいために過ぎなかった，と多くの評伝には書き記されている。

同じ理由で Reading の学校へも二人が一緒にやらされた。ジェーンが授業を受けるのに適していたからではなくて，姉と一緒でないと，妹が非常に惨めな思いをするに違いなかったからである。「もしカサンドラが首を切られるようなことがあれば，ジェーンも運命をともにすると言ってきかなかったでしょう」と母親が述懐していたという (*Life and Letters*, p.26)。

ところで，『伝記と書簡』の著者たちは，ジェーンが姉のカサンドラと一緒に学校生活を送ったのは，余りにも幼い頃のことであり，また，期間も余りにも短かったために，「大して深い印象は受けなかったらしい」(p. 28) という注釈を施しており，この注釈は，その後の評価作者たちによって，ほぼ，額面通りに承けつがれている。しかしながら，文学史上の天才作家の伝記的記述に俟つまでもなく，われわれの身近かな技術の習得や芸事の上達の実例が示すように，すぐれた業績を残す達人の知的発達の端緒

は，きわめて幼少の頃に溯るのが実情である。ジェーン・オースティンのばあい，彼女が変幻自在に操る英語一つだけを取り上げてみても，その微妙な陰影に富む表現や自由自在に屈折する見事な柔軟性は，彼女の語学的訓練が非常に幼い頃に始まっていたことを物語っているもののようだ。彼女の英語は，かなり長じてから修練を始めた者は到底到達し得ない領域に属するもののようだ。彼女の英語は，非常に幼い頃に，ほとんど，本能的に，そして生理的に，微妙なちがい，適切な言いまわしを脳裏にきざみつけられた者のみが持ち得るものである，と筆者は考えている。ジェーン・オースティンの評伝作家の中には，伝記的事実の不足をいいことにして，きわめて大胆な仮説を持ち出す者が続出している。あるものは，甚だ荒唐無稽であり，あるものは甚だ理不尽であるが，ここに，敢えて，ささやかな仮説を一つ立てることを許されるならば，ジェーン・オースティンは，幼い頃，三ツ年上の姉カサンドラと学習時間を共に過ごした際，彼女の力量以上のテキストを読まされても，たとえ，論理的理解において，多分，不十分なところがあったとしても，半ば無意識的に，半ば本能的に，読まされたもの，聞かされたものから，微細な利得を集積して行ったのではあるまいか。

次にオースティン姉妹のために選ばれたのは，当時の有名校の一つであった，Reading の Forbury にある Abbey School であった。それは，フランス人と結婚した Mrs La Tournelle の経営する学校であったが，この婦人はフランス語はひとこともしゃべれなかったという。しかし，このレディングの学校を，多分，11歳の時に（これまでの伝記には9歳の時，と記されているが，Miss Elizabeth Jenkins が入手したオースティン家の banking accounts によれば，オースティン姉妹が Abbey School を退学したのは1784年，つまり，ジェーンが9歳の頃ではなくて，1786年，または1787年ということになる。Cf. *Collected Report of the Jane Austen Society*, 1949—1965, pp. 60-61）退いてからのジェーン・オースティンの教育の担い手が誰であったかを明確に知る手がかりを，われわれは何一つ持ち合わせていない。オースティン姉妹の教育も，もっぱら父親ジョージ・オース

ティン牧師の手で行われた，とする説と，父親の方は，自分の息子たちと友人や知人の子弟から構成される「塾生」の教育にかまけ，娘二人の読書その他の指導の責任は母親のオースティン夫人が引き受けていた，とする説とがありうる。しかし，そのいずれも，後世の伝記作家たちの推測の域を出ないものであって，それを裏打ちする資料はどこにも見当らない。ただ既に書き記したことの繰りかえしに過ぎないが，教区牧師という公職のほかに，家計の不足分を「個人教授」からの収入で補わなければならなかった父親が娘二人をよその学校へ出したのも，父親自身の負担を軽減する意図からであった，というのが，多分，事実に近いであろう。父親には，二人の娘の教育まで引き受ける余力はなかった，と言ってよい。娘たちの知的教育は，当時の教養ある家庭の母親の責任においてなされた，というのが通説であるとすれば，オースティン家だけが，その例外であったと見なすわけにはゆかないであろう。オースティン夫人もまた，学校教育によって，かなりの程度に，その基礎が固まりかけていた娘二人を相手に，かなりの数の学科にわたって，かなり能率の上がる形で教え，且つ，指導していたに違いない。ただ，彼女には，文学に関する専門的訓練，高度の文学修業を娘たちに課するのに必要な熱意が欠けていた。ジェーン・オースティンが *Sense and Sensibility* の制作に示した程度の，高度の作家的力倆を，どのような経路をへて身につけるに至った，かという興味深い課題は未解決のままである。

III

ジェーン・オースティンのことを論ずるばあい，彼女の，いわば，"moral education" については，既に，いくつかのすぐれた著書があるが，彼女の "intellectual education" に関する記述は，ほとんど，皆無と言ってよい。ただ，彼女の教養の大半は自習によるものであった，というのが定説となっている。娘たちの家庭における教育の責任者である母親の指導のもとで，時折，父親からの有力な助言や励ましを得たりして，国語（つ

まり，英語)，外国語（ジェーンのばあいは，主として，フランス語)，作詩，作文などの勉強が，恐らく，かなり，きちんとした形でなされ，また，夜間の適当な時間には，シェイクスピア劇などを，何人かの者が役柄を割り当てられて，声色をつかって朗読するのが，当時の教養ある家庭の習慣となっていた。そしてオースティン家では，父親の愛読書である William Cowper (1731—1800)，George Crabbe (1754—1832)，その他の詩集が，しばしば，朗読の対象となった。そして，甚だしく感受性の強いジェーン・オースティンが，これらの詩人の作品を，ただ，朗読するだけでなく，ほとんど，暗記してしまうほどに熟読したに違いない。しかし，彼女の文学修業が，一家庭人の素人芸の領域を遙かに超えて，イギリス小説史上，屈指の名人芸にまで到達する過程には，誰かすぐれた知性の持主，つまり，ただ単に豊富な文学的教養を身につけているだけでなく，文筆力においても，優に一流作家の列に伍するに足りる人による，厳しい指導が，かなりの期間にわたって，行われたに違いない。ジェーン・オースティンの完結した作品には，すぐれた知性，鋭い洞察，微妙な人間心理の分析，そして適確で柔軟性に富む文体がある。ジェーン・オースティンに高度の小説技法と人間観察力を植えつけてくれたのは，誰の功績であったであろうか。

IV

ジェーン・オースティンが，数篇の名作を公表し，文壇上の地位が確立した後も，彼女は平凡な一家庭人の立場を堅持していたと伝えられるが，彼女がそのきびしい作家修業を，どのようにして行ったかを知り得る機会を与えられたのは，三ツ年上の姉カサンドラをおいては他に見当らない。ところが，この姉は妹については，ほとんど，何も語ってくれていない。ジェーンの数多くの手紙の受信人であり，妹がこの世を去るまで，日本の六畳間ほどの広さしかない狭い寝室を共にしていた姉カサンドラがもっとも大きくクローズアップされるのは，ジェーンが遂に回復することのなかった病魔に取りつかれてからの彼女の看護人としてである。カサンドラと

ジェーンとの間柄は，『高慢と偏見』のジェーンとエリザベスとの間柄でもないし，『良識と感受性』のエリナーとメアリアンとの間柄でもない。カサンドラ宛の数多くのジェーンの手紙が，幸い，かなり無傷のままで保存されているのる，もっぱら，姉カサンドラのお蔭であり，愛する妹の最後を見守った姉カサンドラの姿勢には，全く，間然するところがないと言える。そして妹がもっとも可愛がっていた姪ファニーあてのカサンドラの書簡が三通保存されているのは，彼女の文才，人となり，やさしさ，その他を知りうる手がかりとなっている。それでも尚，われわれの抱くカサンドラ像が，いささか，ひややかなものになりがちなのは，多分，妹ジェーン宛の，おびただしい数にのぼったに違いないカサンドラの書簡が一通も保存されていないことに起因するのではあるまいか。冷静沈着で，理知的傾向が勝ち過ぎたらしい彼女は，ジェーンの死後，ジェーンの手許に保存されていたものと推測される自分の書いた手紙を，すべて，多分，焼却してしまったものと判断される。ジェーン・オースティン評伝作家たちにとって，カサンドラの存在は，何にもまして，嘆かわしいもののように思われてならない。そしてジェーン・オースティンの伝記的事実を，姉カサンドラに次いで詳細に知る立場にあった兄ヘンリー・オースティンも，彼が妹の死後に出版した *Northanger Abbey* と *Persuasion* の合冊本の巻頭に添えた，嘆かわしいほど僅少の分量の 'Biographical Notice of the Author' 以外には，最愛の妹ジェーンについて，何の記録も残してくれていない。また，ジェーンの死去，最初に世に出た，ジェーンの甥 James Edward Austen-Leigh の著書 *Memoir of Jane Austen* (1871) も，ジェーン・オースティンの文学修業については，あまり多くを語ってくれていない。彼女の修業時代の事情を伝えてくれる直接的資料を持たないわれわれに残された唯一の道は，彼女の作品そのものに手がかりを見つけ出すことであろう。そして彼女の作品にそれを探し出す唯一の方法は，ジェーン・オースティンが果してどの程度の文学修業の方法を知っていて，それを自己の作品に盛りこんだかを調べてみることであろう。ジェーン・オースティンは自分が知り得たこと，自分が体験し得たこと以外のことは，一切，筆にしてい

ないという特性の持主であるからである。彼女の作品に，作中人物の文学修業，人間形成，知的教育，その他について書き記しているところが，もしあるとすれば，それは，そのまま，作者自身が体験したこと，知り得たこと，を示すものであろう。

V

ジェーン・オースティンの長篇小説の女主人公の多くは，ごく平凡な，欠点だらけの，未完成の人格の持主である。『良識と感受性』の事実上の女主人公であるメアリアン・ダッシュウッドは「多感で，聡明で，そして万事にひたむきであるが（ch. i)」，激しやすく，自制心を欠く娘に描かれているし，『ノーサンガー僧院』の女主人公キャサリン・モーランドは，もっともヒロインらしくない女性として登場する。『マンスフィールド・パーク』の女主人公ファニー・プライスも，極端にはにかみ屋で，おどおどしていて，物腰がひどくぎごちない小柄な娘である。『説得』の女主人公アン・エリオットは，比較的に完成された，めぐまれた資質の持主として読者の前に姿を現わすが，それでも，彼女の父親や姉妹たちの眼には，ごく平凡な娘としてしか映らない。平凡な女性が，物語の進展とともに，失敗と悔悟，無知と向上の過程を経て，仕合わせな結婚にたどりつくというパターンをこの作者は繰り返し繰り返し描いている。ジェーン・オースティンの小説の多くが，いわば，Bildungsroman と呼ばれるのは，そのためである。『ノーサンガー僧院』のキャサリン・モーランドは，ほとんど教養を身につけていない女性として登場するが，物語の進展とともに，男主人公として設定されたヘンリー・ティルニーの手で啓発されて行くことになる。第一巻第三章では，この両者の間で次のような会話がかわされる。

「私，時々，こう思うことがございましたのよ」とキャサリンがいぶかるような顔をして言った。「ご婦人連のお書きになるものが，殿方のお書きになるものよりも数段まさっているのじゃないか，とね。つま

り———ご婦人たちの方が常にまさっていると考えるのはいけないでしょうか」

「僕が判断する機会を持ちました限りでは，ご婦人連のお書きになるものの文体は，大抵，非の打ちどころがないと思いますが，ただ，三つの点においてはね」

「その三つの点と申しますのは何と何ですの？」

「おしなべて主題を欠いていること，句読点の打ち方が不注意きわまること，それに甚だしい文法無視をしばしば犯すことなんですよ」

「ひどいことをおっしゃるのね！　ご遠慮などしないで，あなたのお世辞など，まっぴらご免こうむります，と申し上げればよかったと思いますわ。文章のことでは，私たち女性のことは，あまり高くは評価なさらないのね」

「女性の方が男性よりも文章が上手だとか，女性の方が二重唱がもっとうまいとか，風景画がもっと上手だとか，いうことを，一般的法則として規定すべきじゃないと僕は思うのですよ。趣味が基礎をなすすべての能力においては，優秀性は男女両性間にかなり平等に分配されているものなんですよ」

多分，多くの女性が抱いていると思われる自己満足と虚栄心とをちくりちくりと刺すに違いない，このユーモアとアイロニーにみちた会話は，やがて，アレン夫人の出現によって中断されることになる。これは勿論作中の二人の主要人物の間で交わされる会話ではあるが，間接的には，作者自身が文章を書く際に，多分，みずからを戒めていた事柄のいくつかを面白可笑しく書き記したものであり，彼女の文学修業が，殊に，英語による表現法において，既に，一家庭婦人のレベルを遙かに超えて，専門家の領域に，かなり深く，踏みこんでいたことを示すものであると言えよう。なお，『ノーサンガー僧院』の第一巻第十四章には，同じくキャサリンとヘンリー・ティルニーとの間で，次のやうなせりふのやりとりがある。

「僕はあなたより何年も前から小説を読み始めたことをお忘れにならないようお願い致します。あなたがまだ少女時代をお宅で過ごしておられて，ほんの小説の見本しか読んでおられなかった頃，僕はオックスフォード大学で研究に従事していましたんですよ」

「私，大してよい見本を読んでたんじゃないと思いますわ。でも，正直に申しまして，『ユドルフォー』を世界一すばらしいご本 (“the nicest book in the world”) だとは，お思いになりません？」

「“The nicest” とおっしゃいましたが，これは，「一番体裁がよい」という意味だと思いますよ。書物の体裁のよしあしは装幀のよしあしによりますからね」

「ヘンリー兄さんたら！」妹のティルニー嬢が言った。「お兄さん，あまり失礼なことをおっしゃるものじゃありませんよ。モーランドさん，兄はあなたをまるで妹の私を扱うのと同じ扱い方をしているのよ。兄は，私の言葉遣いが不正確だと言って，いつも，難癖ばかりつけているんですのよ。兄は，今，あなたに対して全く同じ無礼を働いているんだわ。あなたがおっしゃいました “nicest” という単語は，兄には向いてないのよ。できるだけ早目に，他の単語とお取りかえになられた方がよろしいわ。さもないと，兄はやたらと，ジョンソンとかブレアとかいった学者の名前を持ち出して，私たちを圧倒してしまうわ」

「私，何も間違ったことを申し上げるつもりじゃございませんでしたのよ。でも，『ユドルフォー』はすばらしいご本 (“a nice book”) ですもの，そう申し上げるのが，どこがいけないんでしょうか？」

「おっしゃる通りですよ」ヘンリーが言った。今日はとてもすばらしい日だし(“a very nice day”), われわれはとてもすばらしい散歩をしているし (“we are taking a very nice walk”), あなた方はお二人とも，とてもすばらしいお嬢さんですよ (“you are two very nice young ladies”)。ああ！ こいつは実にすばらしい単語だ (“a very nice word indeed!”) ——これは何にでも使えるからね。しかし，もとを正せば，“nice” という単語は，「体裁のよさ (neatness)」,「適切さ (propriety)」,「つつまし

さ (delicacy)」，または「洗練さ (refinement)」，を表わすばあいにしか使えなかったんですよ。——人々の衣装が小ぎれいであった，とか，情緒が優美であった，とか，取捨選択が洗練されていた，とか言ったものでしたよ。ところが，当節は，あらゆるものについて，とにかく，ほめるとなると "nice" という単語を連発するんですからね」

「でもね，お兄さん」と彼の妹が声を高めて言った。「"Nice という単語は，お兄さんにぴったりだわ。もっとも，お兄さんをほめることにはならないけどね。お兄さんは良識ある人というよりか，やかまし過ぎる人だものね ("more nice than wise")。さあ，モーランドさん，兄さんが正確無比な言葉遣いをして，私たちの粗探しに耽っているのに任せておいて，私たちは『ユドルフォー』を好きなようにほめ合いましょう。とても面白い本ですもの。あのようなご本がお好きなんですの？」

キャサリンとヘンリー・ティルニーと彼の妹の三人の間で交わされる，冗談とからかいまじりの語学談義は，やはり，作者自身が日常の学習の際や，日頃の執筆の際に，いかに言葉の正しい用法に留意していたかを示す一例であると考えてよい。ジェーン・オースティンの言葉遣いは，ただ単に，"current usage" に忠実であっただけでなく，多くのばあい，用語の歴史を過去にまで溯ってよく調べ，できるだけ適切なものを選ぶことに細心の注意を払っていたものと思われる。

ところで，われわれは，ジェーン・オースティンの文学修業，殊に，彼女が用語の選択や文章の彫琢に示したに違いない努力の片鱗を示すデータとして役立ちそうなものを二つほど探し当てたわけであるが，彼女のそのような学習を，誰が，どのようにして指導したかを示すデータには，まだ，行き当っていない。そしてジェーン・オースティンが適確無比な用語や "correct taste" を身につけるまでに至った事実は，立派な指導者の存在を前提とするものであると私は考える。そこで，教養乃至学問は言うまでもなく，行儀作法や人間的価値の開発には全く不向きな Portsmouth のわが家から，Mansfield Park という価値と優雅とを具現する場所へ移し植えら

れた Fanny Price が，いわば，玉の輿に乗るまでを描いた *Mansfield Park* に，それを探してみることにした。すると，巻頭近くに次の一節がある。

Kept back as she was by every body else, his single support could not bring her forward, but his attentions were otherwise of the highest importance in assisting the improvement of her mind, and extending its pleasures. He knew her to be clever, to have a quick apprehension as well as good sense, and a fondness for reading, which, properly directed, must be an education in itself. Miss Lee taught her French, and heard her read the daily portion of History; but he recommended the books which charmed her leisure hours, he encouraged her taste, and corrected her judgment; he made reading useful by talking to her of what she read, and heightened its attraction by judicious praise. In return for such services she loved him better than any body in the world except William; her heart was divided between the two. (I, ii)

彼女は他のすべての人たちによって後方へ押しやられ，彼の支持だけでは彼女を前方へ推し出すことができなかったが，彼の親切な態度は，その他の面で，彼女の知的向上や精神的楽しみを助長するのに最高度に役立った。彼は彼女が生まれつき聡明であり，良識や読書愛好心のほかに，速い理解力をもそなえていることを見抜いており，読書愛好心は，指導よろしきを得れば，それだけで立派な教育効果であるに違いないと思った。家庭教師のリー嬢が彼女にフランス語を教え，『英国史』の日課の分量を読むのを聞いてやった。しかし，彼女が暇な時間に興味深く読むための書物をすすめてくれるのは彼の役目であった。彼は彼女の良い趣味をますます伸ばすようにと励ましてやり，彼女の判断に誤まりがあればそれを正してやり，彼女が読んだものを材料として取り上げて議論し合うことによって，読書を有益なものとし，読んだものについて気の利いたことを彼女が話すと，彼はそれを賢明にほめてやって，読書の魅力を高めるのであった。そのような彼の親切な指導のお返しとして，彼女は兄ウィリアムを除く世界中の誰よりも，彼を愛するのであった。

彼女の心は兄と彼との間で二分されていた。

オースティン家では家庭教師をやとったことがないのは周知の事実であるから，ファニーがリー嬢からフランス語を学んだという記述を，ジェーン・オースティン自身の伝記と結びつけることは断念しなければならない。しかし，それ以下のことを詳細に検討すれば，それが，こじつけとか詭弁とかいったそしりを受けることなく，作者自身の修業時代に結びついていることがわかる。ジェーン・オースティンの長兄ジェームズや三番目の兄ヘンリーがともにオックスフォード出身であり，殊に，ジェームズの方は，きわめて高度の文学的素養の持主であった。ファニー・プライスが心秘かに慕っているエドマンド・バートラムのところにジェームズまたはヘンリー（ジェームズの公算がきわめて大である）を置き換えてみると，妹思いの兄が，オックスフォード大学のすぐれた教師の指導のもとで身につけた専門知識と，親譲りの「教師気質」とを駆使して，物わかりの速い妹に，効果的な「文学的指導」を行った情景が目の前に浮かぶ。教材は，多分，ジェームズまたはヘンリーがオックスフォード在学中に入手したものや，父ジョージ・オースティンの蔵書の中から選ばれたものであったろう。読書後の討論の際，まだ読書体験の浅い妹が一方的な狭い解釈を示すと，兄がそれをやさしく訂正してやり，さらに文学史的背景や人間観察に裏打ちされた妥当な見解を試みて，妹の理解力と分析力を助け，妹が生まれつきの鋭さとひらめきを発揮して，兄の既成の知識を超えた解答を披露するばあいは，兄が驚きと称讃をこめた同意を示し，妹の知的向上と蓄積を見計らって，さらに高度の教材や実験を行ったことであろう。多分，ジェームズまたはヘンリー（重ねて言うが，ジェームズの公算がきわめて大である）が妹たちに対して試みた「教授法」は，今日のすぐれた大学において，すぐれた教授によってなされる教授法にも劣らないものがあり，それにさらに，イギリス文学史上稀に見る，情愛こまやかな兄弟姉妹愛が加わって，驚くほどの効果が上がり，まことにすぐれた女流作家が誕生するに至ったのではあるまいか。*Mansfield Park* の巻頭近くに見出される，きわめてリ

アリスティックな筆致で記されたこの一節には，作者ジェーン・オースティンの，自分を指導してくれた兄への感謝の念がこめられているものと私は解釈している。

VI

ジェーン・オースティンの文学修業という課題を扱うばあい，彼女の "intellectual education' と並行して，その "moral education" をも論じなければならないのは言うまでもない。しかし，後者に関しては，既に，いくつかの論述が公表されており，ごく最近に入手した *Jane Austen and Education* (by D. D. Devlin, 1975) も，やはり，後者，つまり，彼女の "moral education" の考察に終始している。いわば，"What Jane Austen read?" という課題については，多くの業績が既に公表されているが，彼女がどのようにして文学修業を行ったか，どのような修練を経て，あのようなすぐれた作家としての技法を身につけるに至ったか，つまり，"How she read?" という課題については，ジェーン・オースティン研究者たちは，まだ，何も語っていない。この課題を扱うに足りるほどの伝記的資料がないという決定的事実が，その主な理由になっているもののようであるが，筆者は，この小論において，さし当って，問題の所在と，問題解決の手がかりのいくつかを提示するにとどめたい。(1978年9月)